近代日本文学小辞典

三好行雄・浅井　清編

はしがき

ここ数年来つねにいわれつづけていることだが，近代文学や現代文学への関心が年を追って高まってきている。それはまず，研究者層の厚みがとみに拡大したことに示され，また，大学や短大で近代文学（現代文学）を専攻ないし受講する学生が飛躍的に増大しつつあるという現象となってあらわれている。他方では，各種の市民講座や市民大学，あるいはセミナーなどの企画においても，近・現代文学に関する講座が常置されるのが通例になってきた。これは，直接の因果関係はないにしても，とくに第２次世界大戦後，文学自体が市民社会一般に急速に浸透して，多くの読者層を獲得したという事態とも無関係ではないだろう。要するに，享受することから知ることへの関心がつよく呼びさまされたということではないだろうか。

むろん，関心の増大はそのまま近・現代文学の正当な享受や理解にはつながらない。むしろ，編者に身近な学生たちについていえば，研究対象への関心がより細部化すればするほど，個々の作家なり作品なりを支える文学状況総体についての知識が貧しく，あるいは偏頗になるという事態さえ生じている。近・現代文学の動態やそれに関する研究業績について，必要にして十分な知識と情報を提供できる手ごろな辞典の必要性は，いまやきわめて大きいといえよう。有斐閣から『近代日本文学小辞典』を編むことを求められたとき，文学を現に講義している教師のひとりとしてあえて快諾したゆえんである。

近・現代文学に関する辞典は，現在における最新最大の知識・情報を網羅したと目される『日本近代文学大事典』全６巻をはじめ，大小さまざまの類書が刊行されている。本辞典を編むにあたって編者のま

ず留意したことは，屋上に屋を架す愚を避けることであった。そのため，手軽に携帯できるハンディなものをめざしながら，小項目主義をえらぶことで，近・現代文学の総体を把握するに必要かつ十分な知識を凝縮して示すことに努めた。最現代の文学をも収めると同時に，いわゆる大衆文学や推理小説・児童文学など，現代の文学状況として逸することのできぬ分野にも配慮を怠らなかったつもりである。事実の正確さに完璧を期したのはもとよりだが，とりわけ，小項目主義にともないがちな，生硬でそっけない叙述に陥ることを避け，簡明かつ具体的な表現によって，作家や作品の特色を彷彿させることに意を用いた。この点については，幸に編者の意図を諒とせられた多くの執筆者に恵まれ，所期の目的を達しえたと自負している。協力を惜しまれなかった執筆者各位に厚く謝意を表するとともに，本辞典が教師や学生のみならず，多くの文学愛好者の座右の書として活用されることを期待したい。

最後に，本辞典の企画から完成まで，有斐閣編集部の澤井洋紀氏にひとかたならぬお世話になった。附記して，お礼を申しあげたい。

1981年1月

三好　行雄

浅井　　清

凡　例

〔本辞典の構成〕

① 本辞典は，明治より最現代までを対象に小項主義をとり，作家・作品，新聞・雑誌，事項，文芸用語の各分野にわたる2,210項目をおさめ，ジャンルとしては，小説（大衆文学，ＳＦ，推理小説などを含む），評論，戯曲，詩，漢詩文，短歌，俳句，児童文学等々を網羅した。

② 主要作家の項目には，その代表的作品を子項目として付し，別に解説を加えた。

③ 巻末には，人名索引，新聞・雑誌索引，事項索引（文芸用語を含む）および西暦・日本暦対照表を付した。

〔配　列〕

① 見出し語（太字）の配列は，現代かなづかいの五十音順によった。

② 長音，中黒（・）記号，濁音・半濁音は配列上は無視した。

③ 見出し語が同音の場合は，文芸用語，事項，新聞・雑誌の順とした。

〔表　記〕

① 表記は現代かなづかいを用い（ただし，引用文中はこの限りでない），漢字は新字体を原則として使用した。

② 年号は西暦に統一した（巻末に西暦・日本暦対照表を付した）。

③ 人名項目は姓名の後に読みを付し，生没年を記した。また，筆名で通用している人は見出しを筆名により，本文中に本名を付した。その他，主な別称・雅号も記した。

④ 地名や出身校は，おおむね現行の呼称に従った。出身校名は，略記したものもある。

⑤ 作品の発表年は原則として初出年を採ったが，単行本にまとめられた年を採った場合もある。作品名の角書きは，特に必要な場合を除き省略した。

⑥ 主な新聞・雑誌には，創刊・終刊年（月・日）を付した。

⑦ 外来語の項目には，主な原語を原則として一つだけ記した。

〔記　号〕

① 解説文中の作品名，新聞・雑誌名にはすべて『　』を用いた。

② 解説文中の人名，新聞・雑誌，事項，文芸用語などのうち，別項目として立てられており，理解の参考になるものについては，＊印を付した。

③ 人名項目の解説文にある作品のうち，子項目として別に解説されている作品には，†印を付した。

④ 矢印⇨は，指示された項目に記述されていることを示す。

⑤ 人名，事項，文芸用語項目中，重要な項目には末尾〈　〉内に執筆者名を記した。

〔参考辞典〕

本辞典の作成に当っては以下の辞典・書籍を参考資料とした。記して謝意に代える。

『日本近代文学大事典』全6巻，講談社。『新潮日本文学小辞典』新潮社。『現代日本文学大事典』明治書院。『現代作家辞典』東京堂出版。『大衆文学事典』青蛙房。『現代日本文芸総覧』全4巻，明治文献。『近代短歌辞典』新興出版社。『現代短歌年鑑』角川書店。『現代俳句事典』河出書房。『現代俳句辞典』角川書店。『現代文芸用語事典』河出書房。『文学要語辞典』研究社。『文芸用語の基礎知識』至文堂。『文芸年鑑』各年度版，新潮社。『出版年鑑』各年度版，出版ニュース社。

◁あ▷

亞 詩誌。1924・11～27・12，全35冊。亜社発行。大連の安西冬衛*が編集。主要同人に滝口武士，北川冬彦*，のち三好達治*，尾形亀之助*などが参加。短詩運動を展開，昭和前衛詩運動の一先駆となった。

会田綱雄（あいだつなお，1914～ ） 詩人。東京生。日大社会学科に学ぶ。40年軍属として中国に渡り南京特務機関嘱託などとして働く。この間，草野心平*，池田克己，武田泰淳*，堀田善衛*らと識る。46年帰国。復刊『歴程』*に加わる。詩は，生の不条理を特異な説話体ないし民話体で表現する。詩集に『鹹湖(かんこ)』(57)，『狂言』(64)，『汝』(70)，『遺言』(77) など。

会津八一（あいづやいち，1881～1956）歌人，書家。号：秋艸(しゅうそう)道人，渾斎(こんさい)。新潟市生。早大英文卒。のち早大教授。大和を中心とした風土や美術をよんだ歌集『南京新唱』(1924) には，万葉調と近代感覚が合致。他に歌集『鹿鳴集』(40)，『寒燈集』(47) など。「かすがのにおしてるつきのほがらかにあきのゆふべとなりにけるかも」

アイデンティティ（英）identity 他者との関係において自己が同一のままであること。同一性，独自性。米のE・エリクソンが，従来の哲学・論理学の領域を超えて1959年に精神分析的自我心理学の基礎概念として用いてから，自己疎外が一般化する現代の社会状況を背景として，他の分野でも注目され，真の自分，存在証明，主体性，自己固有の生き方や価値観などの意で使われている。江藤淳*の評論には，エリクソンの所説の活用がある。

アイロニー（英）irony ギリシャ語の「とぼける」「隠す」が語源。反語法。述べていることの表面の意味の裏にそれと逆のことを対照的に示したり，場面設定や事件の進行で予想に反するようなことを示したりすること。

アヴァンギャルド（仏）avant-garde 元来は軍隊用語で前衛の意。第1次大戦後フランスを中心におきた先端的・革新的芸術運動の総称。立体派，未来派*，超現実派（シュルレアリスム*）などを含む。わが国での推進者は滝口修造*，花田清輝*ら。

アウトサイダー（英）outsider 局外者，異邦人。英のコーリン・ウィルソンが同名の書 (1956) で，主として文学的人間像を取上げ，常識社会の価値・規範に対立し，内なる理想の秩序を目指す人として積極的に意味づけた。

饗庭篁村（あえばこうそん，1855～1922）小説家，劇評家。本名：与三郎。別号：竹の屋（舎）主人など。江戸生。読売新聞社の文選工をしていたときに見出され作家となる。のち『朝日新聞』で劇評を担当。明治20年前後に須藤南翠*と並び称された小説家で，新旧過渡期文壇の旧派を代表する。小説『当世商人気質(とうせいあきんどかたぎ)』(1886)，『蓮葉(はすは)娘』(87)，紀行文『旅硯』(91)，江戸文学研究書『雀躍(すずめおどり)』(1909) など多数。

饗庭孝男（あえばたかお，1930～ ） 評論家，仏文学者。滋賀県生。南山大文学部卒。のち青山学院大教授。66年『戦後文学論』により文壇に登場。存在論的立場に立つその批評方法は，『遡行と予見』(70)，『反歴史主義の文学』『神なき詩の神学』(72)，『近代の解体』(76)，『批評と表現』(79) などに深化されている。

青空 文芸誌。1925・1～27・6，全28冊。青空社発行。梶井基次郎*，外村繁*，中谷孝雄*，後に三好達治*，北川冬彦*ら，三高から東大へ進学した者が中心の同人誌。掲載された主な作品は，梶井『檸檬』，三好『甃(いし)の上』など。

青野季吉（あおのすえきち，1890～1961）評論家。新潟県生。1915年早大英文科卒。22年『心霊の滅亡』を書いて批評家として出発，以後，『種蒔く人』*『文芸戦線』*同人として，大正末から昭和初頭にかけて活発な評論活動を続け，『「調べた」芸術』(25)，『自

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

然生長と目的意識』(26) などでこの時期のプロレタリア文学*運動に指標的な評論を発表し，重要な役割を果した。その後，日本共産党と対立する労農派に属し，ナップ*と対抗した文芸理論を展開。そのあと次第に革命的な文学運動から退くが，34年頃からは人民戦線的発想からファシズムに抵抗する活動をしている。38年検挙され，転向。敗戦後は日本ペンクラブ*の副会長，日本文芸家協会*会長などになり，幅広い文学者のまとめ役として活躍する一方，『現代文学論』(49)，『文学五十年』(56～57) などの総括的仕事も残している。他に自伝小説『一つの石』(43)，『青野季吉日記』(64) がある。

【転換期の文学】 評論集。1927年刊。『解放の芸術』(26) とともに，大正末年・昭和初期の評論を収録。とりわけ『自然生長と目的意識』は，プロレタリア文学運動とは社会主義意識を作家に自覚させ，階級のための芸術をつくり出す運動であると規定し，目的意識論争*のきっかけとなった論文である。他に，『土の芸術について』(27)，『芸術の革命と革命の芸術』(23) などを収める。〈西垣〉

赤い鳥　児童文芸誌。1918・7～29・3，31・1～36・8，全197冊。赤い鳥社発行。鈴木三重吉*の経営・編集。創刊を志した理由として，世俗的な下卑た子ども読物を排除し芸術的香気のある読物を与えることを挙げている。執筆者に島崎藤村*，森鷗外*，泉鏡花*，佐藤春夫*，徳田秋声*ら全文壇作家が名をつらねているが，中で芥川竜之介*，豊島与志雄*，宇野浩二*らは積極的に協力。後期には坪田譲治*，塚原健二郎，平塚武二，新美南吉*，小林純一，柴野民三らの童話作家が執筆。また，官製の小学唱歌のほかに唄う歌のなかった児童に生命感ある歌を与えるという意図のもとに，北原白秋*が毎号のように新作童謡を発表，山田耕筰らの作曲と相まって童謡普及の端緒を開いた。三重吉選の募集作文，白秋選の児童自由詩，山本鼎選の児童自由画の募集と指導により児童の芸術的創造力を啓発するなど綜合的児童文化運動の推進体となったが，類似雑誌の刊行や大衆雑誌の隆盛におされて後退，三重吉の死で廃刊となった。

赤木桁平（あかぎこうへい，1891～1949）評論家。本名：池崎忠孝。岡山県生。東大法科卒。『「遊蕩文学」の撲滅』(1916) などで軟文学を排撃，『白樺』*派を擁護，生田長江*らと論争した。ユニークだが独断的で粗雑な面があり，晩年は国家主義に傾いた。他に『夏目漱石論』(14)，『亡友芥川竜之介への告別』(30) など。

明石海人（あかしかいじん，1901～39）歌人。静岡県生。ハンセン氏病者のため，出生地も本名も不詳。28歳で発病，32年に長島愛生園に入院。闘病の哀切な叙情が注目された。歌集『白描』(39)，『海人遺稿』(39) がある。「妻は母に母は父に言ふわが病襖へだててその声をきく」

赤と黒　詩誌。1923・1～24・6，号外を含めて全5冊。赤と黒社刊。「詩とは爆弾である！」と宣言して出発したアナキズム*誌。同人は萩原恭次郎*，岡本潤*，壺井繁治*，川崎長太郎*，後れて小野十三郎*など。

アカネ　歌誌。1908・2～09・7，通巻18冊。根岸短歌会*出版部発行。発行者：三井甲之*。『馬酔木(あしび)』*の後継誌として創刊，当初は文芸一般誌としての特色を持ったが，三井の編集態度に批判的な同人伊藤左千夫*らは『阿羅々木(アララギ)』*を創刊し分裂した。

赤旗　⇨せっき

阿川弘之（あがわひろゆき，1920～　）小説家。広島市生。42年東大国文科卒（卒業論文は『志賀直哉』）後，海軍予備学生を志願，台湾と横須賀で訓練を受け，44年中尉として中国の漢口に渡り，通信隊報作業に従事した。敗戦後抑留されたが46年帰国。志賀直哉*の勧めで作家を志し，同年『年年歳歳』『霊三題』を発表。53年『春の城』(52) で文名を確立した。その後は，『雲の墓標』*，『山本五十六』(65)，『暗い波濤』(68～73)，『軍艦長門の生涯』(72～75) などの戦争小説を書く一方，『ぼんこつ』(59～60)，『あひる飛びなさい』(63) などの軽妙な現代的作品や，『舷燈』(66) のように日常生活を淡々と描い

た作品もある。戦争を政治的な角度からとらえるのでなく，その渦中にいる人間の心をありのままに描こうとするのが特徴で，これと同様の発想が，現代の日常を扱った小説にも見られる。

【雲の墓標】 長篇小説。1955年『新潮』に連載。学徒動員された京大生吉野次郎の日記と遺書を中心に，その友人藤倉晶の手記と手紙，最後に友人鹿島の吉野の両親あての手紙を入れて，記録ふうに構成されている。吉野は，戦争の歴史的意味を信じる模範的な学生で，予備学生となってからは，自分の信念をより強いものにつくり上げてゆく。藤倉は，戦争に懐疑的な学生で，吉野の意識が次第に固まってゆくことを憂慮している。結局，藤倉は訓練中に墜落死し，吉野は，簡潔な遺書を書いたのちに木更津基地から特攻機で出撃，生死不明となる。特攻隊員たちの生活と意識をありのままに描いた名作と評されている。〈柘植〉

秋田雨雀（あきたうじゃく，1883～1962）劇作家，小説家，童話作家。本名：徳三。青森県生。1907年早大英文科卒。『第一の暁』(10)，『埋れた春』(13) など浪漫的傾向の戯曲から次第に人道主義・社会主義思想に向い，『土地』三部作（17～18），『国境の夜』*，『骸骨の舞跳』(24) を発表。27年訪ソ。のちプロレタリア科学研究所長，新協劇団顧問となる。戦後は舞台芸術学院院長として後進を育成，進歩的演劇の発展に寄与した。

【国境の夜】 戯曲。4場。1920年『新小説』に発表。21年新劇座初演。舞台は北海道十勝平野の開拓地主大野の家。吹雪の夜，道に迷って助けを求める親子を，自分の生活を妨げられまいとして拒んだ大野は，夜中盗賊に押入られて妻子が殺される夢をみる。悪夢からさめた大野はアイヌ人アンリシカと行倒れの親子を葬おうとする。地主階級の自己分裂と人道的自覚を，純心なアイヌ人との対比によって描く。〈藤木〉

秋浜悟史（あきはまさとし，1934～ ）劇作家。岩手県生。早大演劇科卒。在学中の自由舞台の上演台本『英雄たち』(56) 以来，東北の方言を自在に駆使したユニークな詩的言語に，今日的な問題を提起。『幼児たちの後の祭り』(68) で岸田戯曲賞。他に『ほらんばか』(60)，『冬眠まんざい』(65)，『しらけおばけ』(67) など。

秋元不死男（あきもとふじお，1901～77）俳人。本名：不二雄。秋元松代*は妹。横浜市生。高等小学校卒。東(ひがし)京三の筆名でリアリズムを主張，41年に俳句事件で検挙。48年，『天狼』*創刊に参加，不死男と改号。「もの」に即した表現を志向し，『氷海』(48・6～) を主宰した。句集に『瘤(こぶ)』(50)，『万座』(67)，『甘露集』(77) など。「鳥わたるこきこきこきと罐切れば」

秋元松代（あきもとまつよ，1911～ ）劇作家。兄は秋元不死男*。横浜市生。戦後，三好十郎*の戯曲研究会に参加，『軽塵』(47) でデビュー，以後『芦の花』(48)，『礼服』(49) を発表。家族・兄妹血縁の愛憎を描くが，やがて『ものいわぬ女たち』(54)，『村岡伊平治伝』(58) などに社会的主題と重厚緊密な骨格を兼ね備えた。『常陸坊海尊』*で田村俊子賞。『かさぶた式部考』(69)，『きぬという道連れ』(74)，『七人みさき』(75) などのほか，評伝『菅江真澄』(77) などがある。

【常陸坊海尊(ひたちぼうかいそん)】 戯曲。3幕。1964年刊。義経の従者で，主君を裏切った常陸坊海尊の流亡は，東北地方に古くから伝承される。戦時下，東北に集団疎開した学童たちが，孤児となり，海尊伝説の世界に生の原像を見出す。敗戦から安保まで，経済大国に成長した戦後日本の繁栄の底辺に横たわる民衆の魂の叫びと，その救済。過去と現在を自在に往還する劇的空間の見事な処理が，ドラマの主題を鮮かに浮びあがらせる。〈今村〉

秋山清（あきやまきよし，1905～ ）詩人，評論家。別名：局(つぼね)清。門司市生。日大社会学科中退。24年詩誌『詩戦行』に参加してからアナキズム*文学活動を続ける。戦時中は沈黙せざるをえなかったが，戦後，金子光晴*らと『コスモス』*を創刊。庶民的

発想に基づく社会批判は抵抗詩としてすぐれている。詩集『象のはなし』(59)，『白い花』(66)，評論集『文学の自己批判』(56)，『アナキズム文学史』(75，「戦中戦後篇」77～78)，自伝『目の記憶』(79) など。

秋山駿（あきやましゅん，1930～　）評論家。東京生。早大仏文科卒。56年より14年間，報知新聞社に勤務。60年『小林秀雄』で群像新人賞受賞。63年，小松川女高生殺し事件の少年李珍宇を考察した『想像する自由』，『白痴』に材を得た『イッポリートの告白』等，『内部の人間』(67) としてまとめられたエッセイを次々に発表。作品よりも現代人そのものの生に関心を抱く。「内向の世代」*の代表的批評家。他に『知れざる炎―評伝中原中也』(75～77) など。

秋谷豊（あきやゆたか，1922～　）詩人。埼玉県生。日大予科中退。立原道造*の影響を受け，戦前『四季』*，『文芸汎論』などに作品を発表。戦後は『純粋詩』などの編集に携わったのち，第3次『地球』(50・4～) を創刊，ネオ・ロマンチシズムを唱えた。詩集に『遍歴の手紙』(47)，『降誕祭前夜』(62)，『辺境』(76) など。

芥川竜之介（あくたがわりゅうのすけ，1892～1927）小説家。号：澄江堂主人など。俳号：我鬼。東京生。生後まもなく母が精神障害を病み，ために母の実兄の養子となった。一高を経て1916年東大英文科卒。その間第3・4次『新思潮』*に参加，夏目漱石*に師事した。最初の傑作『羅生門』†は黙殺されたが，漱石に認められた『鼻』(16) の成功で文名を得た。卒業後，海軍機関学校の教壇に立ったが，まもなく辞職して作家生活に専念。洗練された技巧と装飾的な文体で，あるいは洒脱，あるいは鋭利な人生批評を寓した短篇を書き，とりわけ歴史小説に新しい領域を拓いた。新技巧派*の中枢と目されたが，虚構の方法に徹して私小説*の告白性を否定，『地獄変』†や『奉教人の死』(18) などで，日常的生を超えた「刹那の感動」への憧憬を語っている。しかし，20年前後から時代状況にも促されて現実への回帰を強いられ，『秋』(20) 以後，現代を多く主題とする作風に転じた。痼疾の神経衰弱が悪化，健康も衰え，社会主義の抬頭など思想上の混迷を深める時代の転形期に遭遇して芸術観の動揺も激しかった。ついに「ぼんやりした不安」を理由として自殺したが，死を前にした凄絶な心象風景は，哀切な私小説『点鬼簿』(26) や『玄鶴山房』†，遺稿の『歯車』†，『或阿呆の一生』などに鮮かである。『白樺』*派とともに大正期の市民文学を代表し，その死は近代知識人の動揺と崩壊を象徴する事件と目された。

【羅生門】短篇小説。1915年『帝国文学』に発表。王朝末期の荒廃した京都を舞台に，主家を失った下人，蛇を干魚と偽って売った女，その女の死体を糊口の資とする老婆をめぐって，飢えた人間たちの野性と我執のおぞましさを描く。新人の域を脱した技巧と文体，素材を『今昔物語』に仰いだ「歴史」解釈の手法など，芥川の歴史小説の原型を定め，その資質と可能性に初めてみごとな表現を与えた記念碑である。

【地獄変】短篇小説。1918年『大阪毎日新聞』に連載。王朝時代，狷介で傲岸不遜な絵師良秀は地上の権力者堀川の大殿の前でさえ広言をたたく。彼は自分を罰しようとする大殿の意図を見抜きながら，地獄変相の屏風絵を完成するため，最愛の娘をあえて犠牲にする。娘を乗せた車を焼く炎の前で，良秀は獅子王に似た威厳につつまれていた。日常的な恩愛を捨てて芸術家の栄光を生きた良秀に託して，芸術家における真の「人生」とは何かを問う。それは芸術創造の営為にのみ現われ作品の完成によって永遠と化すという独自の芸術至上主義*を具体化した傑作で，「作者の心熱」を感じるという評（正宗白鳥*）もある。典拠は『宇治拾遺物語』など。

【玄鶴山房（げんかくさんぼう）】短篇小説。1927年『中央公論』に発表。死病の床につく玄鶴をめぐって，腰なえの妻，エゴイストの養子夫婦，無気力な息子のかたわら疎ましい人間関係を，看護婦の里野が冷笑して見すえるという構成で，感傷を抑えた簡潔な筆致で愛と憎しみの葛藤をたたみこむように描く。生きてきたことの重さに苦悩し

て死ぬ玄鶴に作者の暗澹たる心象が投影され，ありふれた家庭悲劇を写しながら，人間性の本質的な暗さを彷彿させる。

【歯車】 短篇小説。遺稿として1927年『文芸春秋』に発表。「僕」は「地獄よりも地獄的」な人生を生きていると信じ，発狂の予感に脅え，死を必然の帰結として待ち望んでいる。視野いっぱいに回転する半透明な歯車の幻覚，たえずくりかえされる宿命的な暗合，運命を嘲笑する幻聴など狂気の徴候がさまざまに形を変えて現われ，その間をぬって，自分をつけねらう無気味な影の気配がつきまとう。狂気と死に傾く心象風景を，異常にとぎすまされた神経の戦慄とともに描いた唯一回的な傑作だが，心象から心象へとイメージを連鎖する手法は，「一糸乱れず」(広津和郎*) との評があるようにきわめて構成的である。作者は最後まで個有の方法を捨てていない。〈三好〉

アクチュアリティ (英) actuality 実在，現実性。現実に実在しうる可能性を意味するが，リアリティ (reality) よりも事実性・今日性・時局性・現場性など現在的関心が強調されたものをいう。わが国では戦後，ポール・ルター『記録映画』(1936) をめぐる津村秀夫・今村太平の論争となり，また平野謙*による中間小説*のアクチュアリティ評価 (平野『わがアクチュアリティ説』(63) など) によって注目された。

悪魔主義 悪魔的なものの中に美と快楽を求め，積極的に怪異な暗黒の世界を背景とし，病的なほどに人工的な美を求めた，唯美主義，耽美主義*などの芸術至上主義*の立場をいう。

あさ香社 短歌結社。落合直文*の和歌革新団体。1893年2月創立。与謝野鉄幹*，大町桂月*，塩井雨江，鮎貝槐園ら30名ばかりが集まり，のちに尾上柴舟*，金子薫園*，武島羽衣*，服部躬治*らも加入。各人の才能や個性を伸長，短歌革新運動*の起点となったが，98～99年ごろ分裂。

浅野晃 (あさのあきら，1901～) 詩人，評論家。金沢市生。東大法学部卒。在学中にプロレタリア運動に参加。日本共産党に入党したが，3・15事件で検挙され，獄中で転向。国民文学の勃興を呼びかけ，次第に国粋主義の立場に近づいていった。評論集に『国民文学論の根本問題』(37) 等，詩集に『寒色』(63) 等がある。

浅原六朗 (あさはらろくろう，1895～1977) 小説家。長野県生。早大英文科卒。総合誌『大観』に処女作『鳥籠』(1919) を発表。『不同調』*に参加し，新興芸術派*の中心として『女群行進』(30)，『混血児ジョオヂ』(33) などを刊行。久野豊彦との共著『新社会派文学』(32) もあり，日大芸術学部教授も勤めた。

朝日新聞 1879・1・25～。創刊時は，傍訓・挿絵入りの小(こ)新聞で『大阪朝日新聞』と称した。88年『東京朝日新聞』を発刊，1940年『朝日新聞』と題号を統一する。村山竜平，上野理一の共同経営のもと，高橋健三，池辺三山，内藤湖南，鳥居素川*，長谷川如是閑*，土岐善麿*，杉村楚人冠*，吉野作造，緒方竹虎，笠信太郎，荒垣秀雄，本多勝一，百目鬼(どうめき)恭三郎らの人材を擁して，日本を代表する全国紙へと発展してきた。文芸面では，明治30年代までは半井(なからい)桃水*，渡辺霞亭*らの通俗小説中心だったが，二葉亭四迷*『平凡』の連載，そして夏目漱石*が文芸欄を担当するに及び面目を一新する。『虞美人草』以降の漱石の作品，永井荷風*『冷笑』，長塚節*『土』などがそれである。大正・昭和期をみると，島崎藤村*『新生』，谷崎潤一郎*『痴人の愛』，山本有三*『波』，吉川英治*『宮本武蔵』，戦後に獅子文六*『自由学校』，井上靖*『氷壁』，有吉佐和子*『複合汚染』などがある。

浅見淵 (あさみふかし，1899～1973) 小説家，評論家。神戸市生。早大国文科卒。初めは小説を書き，創作集『目醒時計』(1937) などがある。文芸評論家としては，懇切な批評によって多くの新人を発掘，評論集『昭和文壇側面史』(68) は独自の私的文壇史。

アジア・アフリカ作家会議 Conference of Afro-Asian Writers 1956年，アジアとアフリカの諸国民の友愛の強化と相互関係の密接化をうたって，ニューデリーで開催され

た。その後，中ソ対立，ベトナム問題で分裂，日本協議会もその影響を受けて，アジア・アフリカ作家日本協議会とアジア・アフリカ作家会議協議会に分れた。

馬酔木（あしび）❶歌誌。1903・6～08・1，全32冊。根岸短歌会*発行。伊藤左千夫*を中心に長塚節*，蔵真(けつしん)らによって創刊され，島木赤彦*，古泉千樫*，斎藤茂吉*らも参加。正岡子規*の写生道を実践して，のち『アララギ』*の基礎をつくった。❷俳誌。1928・7～。馬酔木発行所発行。佐々木綾華創刊の『破魔弓(はまゆみ)』(22・4～)をその選者であった水原秋桜子*が改題して主宰。初めは『ホトトギス』*系であったが，31年10月発表の一文を契機に独立，以後，新興俳句*の拠点となり，石田波郷*，加藤楸邨*，高屋窓秋*ほか多彩な新人を育てあげた。

新しき村　1918年11月，武者小路実篤*が九州日向に創設した理想村。実篤自身約8年間在村し，農業にも従事した。38年ダムにより大部分が水没，翌年埼玉県毛呂山町に「東の村」を開設，58年養鶏を主業として村内自活を達成した。

アナキズム（英）anarchism　無政府主義。個人の自由と相互の連帯を基本原理として，権力の象徴たる国家と正反対の生活形態を志向する。大逆事件*後の大杉栄*・荒畑寒村*の『近代思想』*発刊を契機とするわが国のアナキズム思想に関わる文学運動は，宮嶋資夫*らの労働文学*に結節するが，以後，プロレタリア文学*運動との連帯と確執の中で拡散し，萩原恭次郎*，小野十三郎*，岡本潤*らの詩人達がその命脈を保った。

姉崎嘲風（あねざきちょうふう，1873～1949）　宗教学者，評論家。本名：正治。京都府生。東大哲学科卒。東大教授。明治30年代に神秘的浪漫主義を唱え，のち反自然主義*の立場から宗教的理想主義を説いた。学者としては東西文化の交流に尽力した。主著『復活の曙光』(1904)，『法華経の行者日蓮』(16)など。

アフォリズム（英）aphorism　金言，格言，警句，箴言集。短い含蓄のある文句。作者不明のときは「諺」(proverb)，何らかの忠告や処生訓を与えるものは「格言」(maxim)と言うこともある。芥川竜之介*の『侏儒の言葉』など。

アプレ・ゲール（仏）après guerre　原義は戦後の意。第1次大戦後のフランスに興った，戦前の価値感に反逆する芸術上の傾向。わが国では第2次大戦後，『綜合文化』*の中村真一郎*らや退廃的風潮の戦後派*を指す。

阿部昭（あべあきら，1934～　）　小説家。広島市生。59年東大仏文科卒。12年間東京放送に勤務。62年，知恵遅れで不幸な生涯を送った長兄に材を執った処女作『子供部屋』で文学界新人賞受賞。『大いなる日』(69)，『司令の休暇』*で退役軍人であった父の戦後と死を描く。扱うテーマがよく似ているところから「遅れてきた安岡章太郎*」とも呼ばれた。題材に家庭や肉親を扱ったものが多い。他に『十年』(69)，『千年』(72)，『過ぎし楽しき年』(77)など。

【司令の休暇】　中篇小説。1970年『新潮』に発表。帝国海軍大佐であった老司令は癌に冒され死の床にある。この父をめぐる老妻と2組の息子夫婦の感情の葛藤がこの作の中心である。また，かつての老司令の栄光と悲惨がそのまま敗戦国の家父長のそれに重なっている点で，戦後の家のありようを象徴的に描いた作品といえる。息子は父の生き方を全肯定しないが，父を描いて愛情深く，父への鎮魂歌になっている。〈上田〉

安部磯雄（あべいそお，1865～1949）　キリスト教社会主義者。福岡県生。1884年同志社大卒，94年米ハートフォード神学校卒。早大で教えるかたわら，明治30年代の初期社会主義運動に活躍，社会問題と人間精神との改革救済を追求した。著書に『社会問題解釈法』(1901)，『理想の人』(06)など。

安部公房（あべこうぼう，1924～　）　小説家，劇作家。本名：公房(きみふさ)。東京生。1歳から16歳まで満州の奉天（瀋陽）で育つ。成城高校を経て48年東大医学部卒。リルケの影響の強い『無名詩集』(47)の自費出版で出発し，満州時代の経験を生かした小

説『終りし道の標べに』(48) を発表。48年「夜の会」に入会して花田清輝*や佐々木基一*を知る。シュルレアリスム*に関心をもち,『デンドロカカリア』(49),『赤い繭』(50) などのユニークな寓話的作品を発表。51年に『赤い繭』で戦後文学賞,『壁―S・カルマ氏の犯罪』'で芥川賞を受賞した。この頃から日本共産党にかかわり,『飢餓同盟』(54),『けものたちは故郷をめざす』(57) など,民衆の生活感情をリアルに描いた小説を書いたが,一方ではSF*的発想をもつ『水中都市』(52),『第四間氷期』(59) など,その後の発展につながる小説も書いている。62年に日本共産党を離れてからは,『砂の女』',『他人の顔』(64),『燃えつきた地図』(67),『箱男』(73),『密会』(77) とつづく長篇小説によって,国家忌避につながる隣人憎悪,共同体嫌悪の問題をテーマにとりあげ,これを独自の方法と文体で描いた。戯曲では『どれい狩り』(55) で出発し,『幽霊はここにいる』(58),『友達』(67),『棒になった男』(69) などの前衛的な作品を書いた。73年からは演劇グループ「安部公房スタジオ」を主宰している。

【壁―S・カルマ氏の犯罪】 短篇小説。1951年『近代文学』に発表。シュルレアリスムやカフカの影響のもとに書かれた寓話。自分の名前に逃げだされてしまった会社員S・カルマ氏は,空虚になった胸の中に,病院では砂丘の写真を吸収してしまい,動物園ではラクダを吸いこみそうになる。逮捕,裁判,逃亡,そして人形とのデイトなどの奇妙な事件ののち,彼は壁に変形してしまう。

【砂の女】 長篇小説。1962年刊。主人公の教員仁木順平は,昆虫採集旅行に出て,民家に泊まる。その家は,砂の穴の底にあり,女がひとり住んでいる。翌日,仁木は,地上との往来に使う縄ばしごが消えうせ,自分が女とともに砂の底の家に閉じこめられてしまったことを知る。水と食料は地上から届けられ,仁木は,家につもる砂をかき出す仕事をせざるをえなくなる。やがて女は妊娠して病院に連れてゆかれ,縄はしごはそのまま残されるが,仁木はもはや脱出する気持を失っていた。カフカ的な方法と即物的な文体で共同体や人間関係の問題を鋭くえぐった代表作。〈柘植〉

阿部静枝 (あべしずえ,1899～1974) 歌人。本名:志づえ。宮城県生。東京女高師卒。在学中尾上柴舟*に師事し,『水甕』*に入る。のち『ポトナム』*に拠り,1949年『女人短歌』創刊に参加した。歌集に『秋草』(26),『地中』(68) など。批判性の濃い歌風。「東西を分てる橋の切断面ぎざぎざの尖まで鳥歩みゆく (ベルリン)」

阿部次郎 (あべじろう,1883～1959) 哲学者,評論家。山形県生。東大哲学科卒。東北大教授。夏目漱石*門下の一人で,理想主義の立場に立って大正期の教養主義*・人格主義*を主張。その人格は人間の主体性の根本にある生命に根ざすものとした。主著に『三太郎の日記』'のほか,『倫理学の根本問題』(1916),『人格主義』(22),『徳川時代の芸術と社会』(31),『世界文化と日本文化』(34) など。

【三太郎の日記】 感想評論集。1914年刊。『第弐三太郎の日記』(15),『合本三太郎の日記』(18)。筆者の心情を託した青田三太郎という青年の日記を中心に,小説,評論,対話よりなる。内容は,青年の自我のめざめ,向上・完成をめざす内面の苦悩,自嘲,思索の跡が真摯にたどられており,理想主義的立場に貫かれた「人格主義」への道が示されている。豊かな感性と強烈な自意識で描かれた青春の書であり,旧制高校生の必読書であった。

阿部知二 (あべともじ,1903～73) 小説家,評論家。岡山県生。27年東大英文科卒。在学中に舟橋聖一*らの同人誌『朱門』に参加。28年『文芸都市』*同人となり,短篇『日独対抗競技』(30) で認められ,評論集『主知的文学論』(30) を刊行,新興芸術派*の有力な新人として注目をあびた。ジュリアン・バンダ,ジョイス,プルーストなどの方法論をふまえて,感情,情熱,情緒などの混沌とした深淵に知性の光りを投じて新しい合理性を追求しようとした。35年『文学界』*同人と

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

なって『冬の宿』†を発表し，プロレタリア文学*運動挫折後の知識人の混迷に示唆を与えた。長篇『風雪』(38～39) では，軍国主義に抵抗する自由主義的知識人の内面を描いた。戦後は『黒い影』『おぼろ夜の話』(49) などで戦後の精神的混乱を描いた。反動の潮流に抗する態度を貫き，日本文化人会議議長を勤めた。翻訳も多い。

【冬の宿】 長篇小説。1936年『文学界』に連載。語り手の「私」は卒業を間近かにした文学部の学生である。下宿の主人霧島嘉門は資産家の出身だが本能のおもむくままの生活に走って窮乏の一途をたどっている。霧島の妻まつ子は苦難の中でクリスチャンになり神に仕える生活を送っている古い型の女。これに，「私」の恋人とその死，祖国喪失者の犯罪をからませ，霊と肉の相剋という主題を追求した作品で，好評を得た。〈神谷〉

安倍能成（あべよししげ，1883～1966）哲学者，評論家，教育者。松山市生。東大哲学科卒。一高校長，文部大臣，学習院院長。夏目漱石*門下の一人。綱島梁川*の影響を受け，反自然主義*評論で活躍した。大正期の教養主義*者の一人。主著に『思想と文化』(1924)，『岩波茂雄伝』(57) など。

天沢退二郎（あまざわたいじろう，1936～　）詩人，評論家。東京生。東大仏文科卒。大学時代から『凶区』*に拠る。詩を，「語る」という方法では表出しきれない事物を表出する方法と考える。詩集に『道道』(57)，『朝の河』(61)，『時間錯誤』(66)，『死者の砦』(77) など，評論集に『宮沢賢治の彼方へ』(68) など。

網野菊（あみのきく，1900～78）小説家。東京生。20年日本女子大英文科卒。同年『あき（秋）』を自費出版。23年以来志賀直哉*に師事し，その斡旋で短篇集『光子』(26) を刊行，注目された。結婚により一時休筆したが，短篇集『汽車の中で』(40) で復帰。代表作『金の棺』(47)，『さくらの花』(60)，『一期一会』(66) など。

鮎川哲也（あゆかわてつや，1916？～　）小説家。本名：中川透。東京生。経歴については作家自身が秘匿している。懸賞当選の『黒いトランク』(56) はクロフツ風の克明なアリバイ破りで注目された。以後『黒い白鳥』(59)，『憎悪の化石』(62) など，古典的な謎解きの本格ものを多作。他に推理文壇を戯画化した異色の作『死者に笞打て』(64) もある。

鮎川信夫（あゆかわのぶお，1920～　）詩人，評論家。本名：上村隆一。東京生。早大英文科中退。学生時代からモダニズムの詩誌『ＬＵＮＡ』『新領土』に加わり，39年『荒地』*を創刊。太平洋戦争に一兵士として参加，44年病のため帰還し，『戦中手記』を書く（65刊）。戦後は第２次『荒地』や年刊『荒地詩集』などに拠った同グループの運動の中心となって活動，『死んだ男』(47)，『現代詩とは何か』(49～50) などの詩と詩論を発表し，戦争体験と戦後の状況とを内面化し思想化する戦後詩人の先導者となった。その関心のありかたは，日本の近代詩についての批判や，現代詩人会編『死の灰詩集』(54) に現れた社会意識に対する批判にも鮮明に示されている。『鮎川信夫詩集』†，戦前の作品を集めた詩集『橋上の人』(63) などのほか，『現代詩作法』(55) など多くの評論集がある。

【鮎川信夫詩集】 1955年刊。戦後10年間の主要作品41篇を収める。荒涼たる荒地の住人と化した現代の人間の生と死，連帯と孤独とを問い直そうとする意志とともに，死者と交感する魅惑という動機が提示されている。戦争体験を経たモダニストとしての鮎川の詩業を代表する詩集であり，戦後詩史の一つの記念碑である。特に冒頭の『死んだ男』は，『荒地』派のみならず戦後詩全体の出発点として名高い。〈吉田〉

新井紀一（あらいきいち，1890～1966）小説家。群馬県生。高等小学校卒。労働文学誌『黒煙』に参加。『怒れる高村軍曹』(1921) が文壇的出世作となった。主として兵隊ものと労働者ものを作し，前者に『山の誘惑』(22)，『雨の八号室』(23)，後者に『友を売る』(22)，『闘争』(24) などがある。

荒畑寒村（あらはたかんそん，1887～　）

社会運動家，小説家。本名：勝三。横浜市生。高等小学校卒。明治期の無政府主義*者，大正期のボルシェヴィスト，戦前の「労農」主義者，戦後の労働運動再建者また社会党代議士として社会主義史を生きぬく一方，1905年以来の小説・評論類執筆や大杉栄*との『近代思想』*創刊によって，大正社会主義文学の緒を開いた。著書に『谷中村滅亡史』(07)，小説集『逃避者』(16)，『寒村自伝』(48～65)，『平民社時代』(正続，73・79) など。

【新版寒村自伝】 1965年刊。横浜遊廓の茶屋に生れ，やがて社会主義者として歩み続け，現在の執筆活動にまでいたった一筋の生涯を巧みな文章で綴る。日本社会主義史の貴重な資料であり，かつ筆者の魅力的な人柄をうかがわせる優れた自伝文学でもある。48年，54年，61年と順次書きつがれて刊行されたため，通常はこの新版を含む4種のものがすべて『寒村自伝』と呼ばれている。〈今井〉

荒正人 (あらまさひと，1913～79) 評論家。初期の筆名：赤木俊。福島県生。山口高校在学中に佐々木基一*と知り，マルクス主義に立って学生運動に没頭。38年東大英文科卒業後，中学教師をしながら埴谷雄高*の『構想』*や大井広介*らの『現代文学』*に参加，旧唯物論研究会の伊豆公夫，森宏一らと交際，科学技術の進歩を信ずる立場から人類史を予見する思考方法を育てた。戦後，『近代文学』*の創刊に参加し『第二の青春』†を発表，「政治と文学論争」*を交わしながら世代論やエゴイズム論，主体性論争*を展開，加藤周一*との間に星菫派論争も起った。鋭い思考回転とパセティックな論調で，戦後批評家の代表的存在となる。さらに徳冨蘆花論の『負け犬』(47) や，『戦後』(48)，『赤い手帳』(49) などの評論集を出した後，わが国の市民文学の系譜と可能性を求めて『市民文学論』(55) を著す。関心は漱石へ拡がって，『夏目漱石』(57) などを書いたほか，集英社版漱石全集を編集，その別巻『漱石研究年表』(74) で毎日芸術賞を受けた。

【第二の青春】 評論集。標題の評論のほか，政治と文学論争の評論を集め，1947年刊。戦前左翼運動の末期頽廃と戦中の暗い谷間におけるエゴイズムの凝視を通して，人間性の再生を主張。「民衆とはわたしだ」という立場から，小市民インテリゲンチャの観念的「革命」観を扱って，戦後の精神的混迷のなかにいた若い世代に大きな影響を与えた。〈亀井〉

アララギ 歌誌。1908・10～。誌名は常緑樹イチイの異称。はじめ『阿羅ゝ木』と書き，根岸短歌会*の蕨真(けつしん)が出資し，伊藤左千夫*が編集して，千葉県の埴岡短歌会から創刊された。09年9月同系の地方誌『比牟呂(ひむろ)』と合併。これを機会に東京本所の左千夫宅に本拠を移し，誌名を『アララギ』に，発行所名を「アララギ発行所」に改め，月刊誌としての体裁を整えた。左千夫没後は古泉千樫*，斎藤茂吉*，島木赤彦*の順で発行責任者となり，内部論議を通して獲得した写生*の理論が同人相互の創作に生かされて，17年頃には歌壇の主流を占めるに至った。赤彦没後は茂吉を経て土屋文明*が先頭に立ち，戦後のプロレタリア短歌*運動からの攻勢に対処し，その写実の奥義をさらに敷衍するかたちで地方に多くの系列誌の誕生を促した。現在の編集人は吉田正俊，発行人は五味保義。

有島生馬 (ありしまいくま，1882～1974) 画家，小説家。横浜市生。本名：壬生馬(みぶま)。有島武郎*の弟。東京外語イタリー語科卒。『白樺』*創刊同人。後期印象派の影響下の画家で，1914年二科会の創立に加わり，以後洋画壇で重きをなす。小説に『蝙蝠の如く』(11～12)，『嘘の果(み)』(19～21) など，美術随想『美術の秋』(20) などがある。

有島武郎 (ありしまたけお，1878～1923) 小説家。東京生。弟に有島生馬*，里見弴*がいる。学習院中等科を経て1901年札幌農学校卒。農学校在学中，級友森本厚吉の影響でキリスト教に入る。1903年渡米，ハヴァフォード大学，ハーヴァード大学に学ぶ。在米中信仰に懐疑を抱き，アナキズム*に触れ共鳴，またホイットマン，ゴーリキー，イプセンらの文学を耽読。07年帰国，母校の教師とな

る。10年『白樺』*に同人として参加，『或る女のグリンプス』(11～13) を連載の他，『お末の死』(14)，『宣言』(15) などを発表した。16年父と妻の死が契機となって本格的に文学に打込み，『カインの末裔』(17)，『生れ出る悩み』†『石にひしがれた雑草』『迷路』(18) など集中的に作品を発表し，一躍文壇の人気作家となった。そして19年，『或る女のグリンプス』を改稿して前篇とし，後篇を書き下して『或女』†を完成し，続いて20年独自の生命哲学『惜みなく愛は奪ふ』の決定稿を発表して，有島の文学・思想の頂点となる仕事を果した。以後は創作力に衰えを見せ，『星座』(22)，『酒狂』『親子』(23) などを書くに止まるが，当時の歴史状況の中にあって有産階級の知識人がいかに生きるかに真摯に苦悩し，人間変革の難しさを語った『宣言一つ』(22) を発表した。他方，財産放棄や生活改善を考え，有島農場を解放したりした (22) が，次第に虚無的となり，人妻波多野秋子と情死してその生涯を閉じた。『白樺』派の中にあって最後まで階級的矛盾の問題を切捨てず女性解放にも注目した良心的知識人として大正文学史上に主要な位置を占める。

【生れ出(いず)る悩み】 中篇小説。1918年『大阪毎日新聞』に連載。北海道岩内に漁師として働きながら，画家としての志を捨て切れず，黙々として10年の間スケッチに精進する青年の，芸術と生活の相剋，その中での苦悩と歓喜をうたい上げた作品。芸術創造の苦悩を労働者の中に見出したところに，有島の芸術至上主義*と民衆志向を統一する理想・夢がみられる。作者の理想主義的な一面を代表する作品である。画家木田金次郎がモデル。

【或女】 長篇小説。前篇は『或る女のグリンプス』を改稿したもの，後篇は書下し。1919年『有島武郎著作集』第8・9集として刊行。主人公早月葉子は強烈な自我の持主で，因襲と束縛を断ち切ろうとする新しい女ではあるが，生の喜びの源泉を男性に求めずにはいられず，経済的にも男性に頼ろうとする女性である。そのような女性が，20世紀初頭の日本の現実の中で，矛盾を切り裂くように前につきすすみ，生の喜びの絶頂から破滅の死に至るまでを，激しく執拗に描き切っている。自然主義*よりも一歩深化した本格的リアリズムの作品として大正文学史上重要な意義を持つ。〈西垣〉

有馬頼義（ありまよりちか，1918～80）小説家。東京生。早稲田第一高等学院中退。父頼寧(よりやす)は伯爵，農相。名門出身の宿命と疎外された人間の立場にたつ社会正義とヒューマニズムとが作風の根本にある。代表作に『終身未決囚』(54，直木賞)，『四万人の目撃者』(58)，『貴三郎一代』(64) など。

有吉佐和子（ありよしさわこ，1931～　）小説家。和歌山市生。東京女子大短大英文科卒。在学中『演劇界』懸賞論文に入賞。一時出版社に勤め，また吾妻徳穂の秘書となる。第15次『新思潮』*に参加。『地唄』(56) が芥川賞候補となって文壇に登場。これに始まる初期の作品はいずれも古い伝統的芸の世界と新しい近代的教養の世界の葛藤を描いて，以後多様な展開を示す有吉文学の原点となる。ひきつづきその作品が直木賞候補となり，芸術祭賞および同奨励賞をうけるなど，才女の名をほしいままにした。『紀ノ川』†始まる年代記的大河小説は『助左衛門四代記』(62～63)，『有田川』(63) とつづき，『華岡青洲の妻』(66) では女流文学賞受賞。また社会問題を取上げたものが多く，『非色』(63～64)，『ぶえるとりこ日記』(64) 等があり，さらに『恍惚の人』(72)，『複合汚染』(74～75)，『中国レポート』(78～79) は社会的に大きな反響をまきおこした。

【紀ノ川】 長篇小説。1959年『婦人画報』に連載。作者の母の郷里紀州が舞台。逞しく生き抜く紀州女「花」を中心に4代に及ぶ家族の年代記を描きつつ家霊を迎ろうとしたもので，ヒロインのモデルは作者の祖母である。多くの現代作家がその作品の中に土の匂いを失っている現在，作者が過去の時代を生きた女のいのちとの対話によって自己を知ろうとしていることは注目される。以後この系列に入る作品を次々に発表した。〈石丸〉

ARS（アルス） 文芸誌。1915・4～10，全7冊。阿蘭陀書房発行。森鷗外*，上田敏*を顧問にし，独自の見識にかなう一流作家の寄稿と新進の紹介を方針に，北原白秋*が編集にあたった。耽美主義*運動の一環を担う。

アルティザン（仏）artisan 職人。職人芸的な熟練した技巧をもつ文学者についていわれ，artist（芸術家）に対立する意味で，おとしめていわれる場合もある。戦後派作家が既成作家の常套性を批判してこの語を用いたことがある。

アレゴリー（英）allegory 寓意。抽象的・精神的意味をもつ事柄を具体的形式によって表現する文学。バンヤン『天路歴程』をはじめ，ジョイス，カフカ，わが国では安部公房*などにアレゴリーへの志向がみられる。

荒地 詩誌。第1次：1939・3～40・5，全5冊。荒地発行所発行。鮎川信夫*，森川義信が中心。第2次：47・9～48・6，全6冊。岩谷書店，のち東京書店発行。鮎川，田村隆一*，三好豊一郎*，中桐雅夫*，北村太郎*，木原孝一*，黒田三郎*ら戦前の若いモダニストで深刻に戦争をくぐった詩人たちが結集，戦後詩の原点を創った。なお，年刊アンソロジー『荒地詩集』1～8集（51～58），同別冊『詩と詩論』2集（53，54）等が出された。

淡島寒月（あわしまかんげつ，1859～1926）小説家，随筆家。本名：宝受郎。江戸生。福沢諭吉*の影響で西欧に憧れた一時を経て，1880年ごろ山東京伝の『骨董集』を読んで江戸文学に開眼，とくに西鶴に傾倒し，尾崎紅葉*，幸田露伴*らによる西鶴や元禄文学再評価の機運を推進した。『百美人』（89）などの小説もある。

栗津則雄（あわづのりお，1927～ ） 評論家，仏文学者。愛知県生。東大仏文科卒。のち法大教授。ランボーに影響され，文学・美術・音楽など多方面に批評の筆を執る。主な評論に『ルドン』（66），『詩人たち』（69），『解体と表現』（72），『文体の発見』（78），翻訳に『ランボー全作品集』（65）などがある。

阿波野青畝（あわのせいほ，1899～ ） 俳人。本名：敏雄。奈良県生。畝傍中学卒。『ホトトギス』*に拠って昭和初期に活躍，水原秋桜子*，山口誓子*，高野素十*と並んで4Sに数えられた。俳誌『かつらぎ』（1929・1～）を創刊主宰。しみじみとした写生句に特徴がある。句集に『万両』（31），『国原』（42），『甲子園』（72），『不勝簪（ふしょうしん）』（80）など。「葛城の山ふところに寝釈迦かな」

アンガジュマン（仏）engagement 社会参加，自己拘束。原義は，兵役志願，誓うこと，抵当に入れること。第2次大戦後，サルトルの実存主義*哲学の用語として定着した。人間が自由な主体として将来の不確実性に賭けるとき，同時に自己の客体性に責任を負って自己を拘束することをさす。このことから，作家の理念と行動の一貫性が問題となるが，サルトルは，言語への強い信頼を支えに，インドシナ戦争反対など，時代状況への発言を行った。

安西均（あんざいひとし，1919～ ） 詩人。本姓：やすにし。福岡県生。福岡師範中退。『朝日新聞』学芸部記者を経て，日本デザインセンターに勤務。日本古典をはじめ広い範囲に取材し，人間世界を憂愁ととらえる。詩集に『花の店』（55），『美男』（58），『葉の桜』（61），『夜の驟雨』（64），『金閣』（78）など。

安西冬衛（あんざいふゆえ，1898～1965）詩人。本名：勝。奈良県生。堺中学卒。在学中から『ホトトギス』*系俳句に親しむ。1919年大連に渡り，翌年満鉄に入ったが，寒気による右膝関節炎で右脚切断。療養中詩作に入り，24年，北川冬彦*らと『亞』*を創刊。以後『詩と詩論』*，『文学』*などに属し，昭和モダニズム詩の推進者となる。戦後は『日本未来派』*などに拠る。詩集に『軍艦茉莉』*，『座せる闘牛士』（49）など。

【軍艦茉莉（まり）】 処女詩集。1929年刊。大連という都市と一肢喪失という肉体条件から生みだされた耽奇な夢に満ちた作品が集められている。冒頭の『軍艦茉莉』，末尾の『物集茉莉』などにその特色がよく出ている。一方「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた」（春）の構成風短詩には高雅な趣味性があって，昭和モダニズム詩の

特性をよく示している。〈安藤〉

アンソロジー（英）anthology　ギリシァ語で「花を集める」が語源。名詩選，詞華集。最近は，個々別々の詩人たちの作品選集，または，国別，地方別，時代別の，詩，散文，戯曲などの抜粋を呼ぶようになっている。

安東次男（あんどうつぐお，1919～　）詩人，評論家。岡山県生。東大経済学部卒。戦後第2次『コスモス』*同人となり，詩集『六月のみどりの夜は』(50)，『蘭』(51) で強い社会意識と前衛的な手法とを融合させ，戦後詩人としての地位を確立，詩画集『CALENDRIER（カランドリエ）』(60) で詩境を深めた。評論家としても，『幻視者の文学』(60)，『澱河歌の周辺』(62)，『芭蕉七部集評釈』（正続，73・78）など，シュルレアリスムから日本古典まで幅広く論じている。

安藤鶴夫（あんどうつるお，1908～69）劇評家，小説家，随筆家。東京生。父は8世竹本都大夫。法大仏文科卒業後，39年都新聞社に入社，のち『読売新聞』に歌舞伎・文楽の劇評を執筆。著書に，下町の人情に愛情をこめた『巷談本牧亭』(63，直木賞) の他，『落語鑑賞』(49)，『寄席紳士録』(60) 等がある。

◁い▷

飯沢匡（いいざわただす，1909～　）劇作家，演出家，放送作家，小説家。本名：伊沢紀（ただす）。和歌山県生。文化学院卒。テアトル・コメディに参加，『藤原閣下の燕尾服』(32) でデビュー，『二号』(54)，『五人のモヨノ』(67)，『もう一人のヒト』(70)，『9階の42号室』(77)，『夜の笑い』(78) など，一貫して鋭い社会諷刺と反骨のパロディにより，本格喜劇の第一人者として活躍。『ヤン坊ニン坊トン坊』(54～56) などで放送作家としても知られる。

飯島耕一（いいじまこういち，1930～　）詩人，評論家。岡山市生。東大仏文科卒。53年，敗戦による価値の崩壊感と空白感とを基調とした処女詩集『他人の空』を刊行，新しい世代の登場として注目された。シュルレアリスムに関心が深く，59年，清岡卓行*，吉岡実*，大岡信*らと詩誌『鰐』を創刊，また『日本のシュールレアリスム』(63) などの著書がある。詩集は他に『ゴヤのファースト・ネームは』(74)，『バルセロナ』(76)，『next』(78)，『宮古』(79) など。

飯田蛇笏（いいだだこつ，1885～1962）俳人。本名：武治。別号：山廬。山梨県生。文学に憧れ上京，早大英文科に入学。1908年ごろ高浜虚子*膝下の「俳諧散心」等で修業したが，虚子の小説転向を機に早大を中退，帰郷した。12年虚子の俳壇復帰とともに句作を再開，『ホトトギス』*の代表作家となった。その後『雲母』*を主宰。その重厚な句風は山国の風土と蛇笏の個性の相俟ったもの。句集に『山廬集』†，『山響（こだま）集』(40)，『家郷の霧』(56) など。「芋の露連山影を正しうす」

【山廬（さんろ）集】　処女句集。1932年刊。1779句，ほぼ30年にわたる句業を集める。既に『雲母』を主宰して十数年を経，俳壇にその地歩を築いていた著者としては遅きにすぎた出版であるが，それは芭蕉が生前に一篇の家集もなかったという事実に由縁している。「折とりてはらりとおもき芒かな」等，いよいよその円熟期に達しようとする蛇笏の名吟を収める。〈本井〉

いいだ・もも（1926～　）小説家，評論家。本名：飯田桃。別名：宮本治。東京生。東大法学部卒。在学中より雑誌『世代』の有力同人。共産党員として活躍したが，離党。65年べ平連の中心メンバーとして活躍，以後新左翼の理論的な指導者となる。小説に『斥候（ものみ）よ，夜はなお長きや』(61)，『アメリカの英雄』(65) など。

飯田竜太（いいだりゅうた，1920～　）俳人。山梨県生。国学院大国文科卒。飯田蛇笏*の4男として生れたが，戦時中3人の兄を失い飯田家を嗣ぐ。学生時代から句作，62年父の死により『雲母』*を主宰。姿の美しい句風が特徴。句集に『百戸の谿』(54)，『山の木』(75) など。「一月の川一月の谷の中」

生島治郎（いくしまじろう，1933～　）小説家。本名：小泉太郎。上海生。早大英文科卒。推理小説誌の編集長を経て，片脚の私立探偵を創造したハードボイルド*『傷痕の街』(64) で作家活動に入る。警察を追われた元刑事の執念を描いた『追いつめる』(67) で直木賞を受賞。他に『薄倖の街』(71)，『白いパスポート』(75) など。

生田春月（いくたしゅんげつ，1892～1930）詩人，翻訳家。本名：清平。米子市生。高等小学校中退。キリスト教的・人道主義的社会思想から次第に虚無思想に傾き，播磨灘に投身。詩集『霊魂の秋』(1917)，『象徴の烏賊(いか)』(30) など，自伝小説『相寄る魂』(21～24)，評論集『山家文学論集』(27) などの他，翻訳，研究も多い。

生田長江（いくたちょうこう，1882～1936）評論家，小説家，劇作家，翻訳家。本名：弘治。別号：星郊。鳥取県生。1906年東大哲学科卒。『小栗風葉論』(06) で文壇に知られた。はじめ自然主義*の同調者であったが後に批判者に転じた。ニーチェの影響を受く。『白樺』*派批判や社会主義支持でも知られる。

池谷信三郎（いけたにしんざぶろう，1900～33）小説家，劇作家。東京生。一高を経て東大法学部に入学，まもなく休学して渡欧しベルリン大学法科に籍をおいた。関東大震災で実家焼失，生活の資を得るために『時事新報』懸賞小説に応募した『望郷』(25) が入選し作家生活に入った。新感覚派*，新興芸術派*にも参加したが，演劇活動に主力を注いだ。代表作は小説『橋』(27)，『有閑夫人』(28) など。

池田宣政　⇨南(みなみ)洋一郎

池田満寿夫（いけだますお，1934～　）版画家，小説家。中国瀋陽市生。長野北高卒。ベニス・ビエンナーレ展で国際大賞を受賞した著名な版画家であるが，小説『エーゲ海に捧ぐ』(76) で芥川賞を受賞。抒情的なエロティシズムを特徴としている。

池田みち子（いけだみちこ，1914～　）小説家。京都府生。日大芸術科卒。日本写真公社勤務。『醜婦伝』(50) で注目をあび，肉体派の風俗作家として時流に迎えられた。『黒い手』(58～60)，『山谷の女たち』(67) など。

池波正太郎（いけなみしょうたろう，1923～　）劇作家，小説家。東京生。小学校卒業後，店員，徴用工，水兵を経て，戦後はしばらく都庁に勤務。長谷川伸*門下。新国劇*の脚本執筆のかたわら小説『錯乱』(60) で直木賞受賞。特異な背景設定と人情味に富む伝奇性に特色をもち，『にっぽん怪盗伝』(68)，『鬼平犯科帳』シリーズ（68～）などがある。

石井柏亭（いしいはくてい，1882～1958）画家，詩人。本名：満吉。東京生。東京美術学校洋画科選科中退。文化学院学監，東大講師。『明星』*に挿絵や詩を寄稿，『方寸』*の創刊や「パンの会」*創始の中心となる。北原白秋*，木下杢太郎*らと親交をもち，耽美主義*運動および美術と文芸の交流に寄与。美術評論，画人伝，紀行など著書も多い。

石井桃子（いしいももこ，1907～　）童話作家。浦和市生。28年日本女子大英文科卒。文芸春秋社，新潮社（山本有三*の『日本少国民文庫』），岩波書店等の編集に従事，かたわら英米児童文学の翻訳と創作に励んだが，『ノンちゃん雲に乗る』†，『山のトムさん』(47)，『迷子の天使』(59) 等で作家的地位を得た。翻訳書も多く，共著の『子どもと文学』(60) では日本の伝統童話を否定する独自の文学観をのべている。

【ノンちゃん雲に乗る】 長篇童話。第2次大戦中ひそかに書かれていたが1947年刊，戦後児童文学の基点となった。明るくすなおな少女ノブ子を主人公に現実と空想の交錯するファンタジックな物語で，ベストセラーとなり映画にもなったが，この人気の源泉は，戦後民主主義が定着した市民階級の人格主義的な教育観に合致したことにある。〈浜野〉

石井露月（いしいろげつ，1873～1928）俳人。本名：祐治。秋田県生。秋田中学を中退，上京。正岡子規*の知遇を得て新聞『日本』*の記者となる。その後帰郷，医師となった。句風は重厚・壮大。1900年島田五空らと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.